Faculty Development
INVITATION

山梨大学教育学部
第42号
March 21, 2025

2024年度のFD事業

ＦＤ（Faculty Diveropment）とは、教員が授業内容･方法を改善し向上させるための組織的な取組のことです。山梨大学教育学部では、教員養成を大学で行うことの意義、他の学部ではなく教育学部で行うことの意義、そして、山梨大学教育学部だからこそできる教員養成のあり方を追求し、さまざまなＦＤ活動を継続して行っています。2024年度は、赴任直後の初任者研修（４月30日)、附属学校園での初任者研修（７月７日：附属中学校、７月15日：附属特別支援学校)、ＦＤ研修会（７月10日、９月18日、11月６日、２月12日：全４回）などを行いました。

最近のＦＤ研修会では、通常１回の研修会を20分間程度で構成しますが、本年度は、２回目の研修会において、テーマを鑑みて講師を３名招き、通常より長い時間の研修会（40分間）を試みました。このような取り組みも教職員の皆様に振り返っていただき、ご意見をいただきながら、必要に応じて改善していきたいと考えております。ぜひ FD Invitation をお読みいただき、忌憚のないご意見をいただければ幸いです。

FD委員会委員長　吉井 勘人

	開催日	題 目	講 師
第１回	7/10（水）	学生メンタルサポートについて	学生サポートセンターCS室 西谷　晋二 先生
第２回	9/18（水）	教職大学院の今とこれから	教育実践創生講座 佐々木智謙 先生 小池　健二 先生 早川　　健 先生
第３回	11/6（水）	教員養成課程でのＩＣＴ活用のヒント	附属教育実践総合センター 三井　一希 先生
第４回	R7 2/12（水）	地域学習アシスト事業の成果と課題 参加学生の教師効力感の変化	山梨県小学校教育養成 特別教育プログラム 田中健史朗 先生

2024年度のＦＤ研修会

第１回 FD研修会
「学生メンタルサポートについて」

西谷 晋二

2023年度より、学生サポートセンターは相談窓口を一本化し、相談に来た学生に適切な部署が担当できるよう体制を整えました。その結果、2023年度は全体の新規申込の９割をＣＳ室が担当し、教育学域の学生からの相談も同程度の割合でＣＳ室が担当いたしました。教育学域の学生は自身の進路に悩みを抱えるだけでなく、教師といった対人関係を重視する職業を志望していることもあり、他者との関係性においても悩みやすいといった傾向が見られました。しかし、このことは他者理解や対人スキルの向上につながる可能性があるため、学域としては過剰な支援を避けつつ、学生個人が自己理解を深める大切な契機でもあると捉えていくことが必要であると言えます。一方で、大学全体として学生支援体制を強化していく必要があることから、学生が学生をサポートし、学生の主体性や互助機能を育む活動としてのピア・サポートの活動をＣＳ室が準備していることについても言及いたしました。

第2回 FD研修会
「教職大学院の今とこれから」

「課題研究について」　佐々木 智謙

教職大学院では、令和３～５年度の３年間、意欲の高い院生と、質の高い教育活動を行う教職員の方々に囲まれ、大変お世話になりました。今回のＦＤ研修会では、教職大学院の特色ある授業科目「課題研究」について、ご紹介させてもらいました。

本科目（課題研究Ⅰ～Ⅲ）は、金曜３・４時間目に隔週で行われており、各院生（M１・M２）が、自らの取り組む研究の進捗状況や実習の様子等を報告しています。報告は、院生や教員（含：客員・実務家教員）の研究内容・専門性・人数等を考慮して編成された６つの基本グループ内（約15人）で行われます。月に１度は全ての院生に発表機会があり、毎回活発な議論が展開され、研究の推進や深化に極めて重要な時間となっています。

課題研究の成果は、２月の教育実践フォーラムや教育実践報告書（４～８頁）で公開されます。本研究成果が、取り組んだ院生のみならず、県内外の教育関係者に還元されることを切に願っております。

「教科横断型・総合型プロジェクト実践論について」　小池 健二

教職大学院で一緒に活動させていただきました早川先生、佐々木先生と今回のＦＤ研修会を担当し、私からは教科領域実践開発コースの必修科目「初等（中等）教科横断型・総合型プロジェクト実践論」について紹介させていただきました。

令和元年の拡充改組により新設された教科領域実践開発コースでは、教科横断・校種縦断に基づき、より高度な授業開発・実践・評価のできる教員を育成することを目指しています。その上でも重要な役割を担う本科目は、学部の教科教育コースから異動した教員が中心となって運営しています。前半８回は講義形式、後半はグループで教科横断型の授業や総合的学習（探究）の時間の授業を構想し、最終回には各グループに発表してもらいます。

時間の関係もあり、ＦＤ研修会では授業の雰囲気を十分にお伝えできなかったかもしれませんが、これから大学院に異動される先生方に少しでも参考となれば幸いです。

「教職大学院の歩みと未来への展望」

早川　健

以前在籍されていた小池健二先生、佐々木智謙先生とともに、本学教職大学院の取り組みを紹介させていただきました。「高度な教育実践力を有するスクールリーダーの養成」を目指し、平成22年に定員14名という全国最小規模の教職大学院としてスタートしました。その後、平成31年４月に拡充改組、教科教育コースが新設され、「教科横断」「校種縦断」の視点で教科の本質を踏まえた授業構想など総合的な実践力を養成することとなりました。山梨の教育現場を俯瞰した授業「山梨の学校改革」では教育関係者を講師として招き、最新の教育現状と課題を整理しながら、地域に密着した学校改革を探究する機会を提供しています。理論と実践を修得した修了生は、令和５年度修了時点で255名となり、県内外の学校現場の重要な場で活躍しています。本格的なデジタル学習基盤の教育の時代を迎え、教職大学院の存在意義は今後ますます高まると思われます。引き続き、教職大学院へのご支援をよろしくお願いいたします。

第3回 FD研修会
「教員養成課程での ICT 活用のヒント」

三井 一希

「教員養成課程でのＩＣＴ活用のヒント」と題したＦＤ研修を行いました。今回のＦＤ研修では大きく２つの話題を扱いました。

１つ目は学校現場におけるＧＩＧＡスクール構想の進展状況についてです。2nd.ＧＩＧＡへ向かおうとしている現在、学校現場では何が起きているのか、これから何が求められるのかを取り上げました。全国学力・学習状況調査がＣＢＴ（Computer Based Testing）に移行していくことは参加者の皆様の関心も高かったようです。

２つ目はやまなし情報教育推進室が制作した「個別最適な学びと協働的な学びを実現するＩＣＴを活用した授業づくり」に関する研修動画、附属学校園が制作した「山梨大学教育学部附属４校園ＩＣＴ活用実践事例集」についてです。これらの動画や実践事例集の概要をお伝えし、大学の授業でどのように活用できるのかについて考えていただくようにしました。

デジタル学習基盤のなか、教育におけるＩＣＴの活用や情報活用能力の育成について学生が存分に学べる学修環境の構築に向け、今後も自分の専門性を生かした情報を提供してまいります。

第4回 FD研修会
「地域学習アシスト事業の成果と課題」

田中 健史朗

地域学習アシスト事業は地域の公立小学校が実際に抱える課題に対して、教育学部でチームをつくり、１年間同じ学級をアシストする活動です。令和元年度にスタートし、昨年度で５年が経過しました。その５年の成果と課題について説明させていただきました。

参加学生の教師効力感の変化という観点から検証した結果、教育ボランティアや教育実習を経験した学生であっても、地域学習アシスト事業に参加した学生は生徒指導に関する教師効力感の向上が認められました。チームは大学教員、実務家教員、教職大学院の院生（現職教員・ストレートマスター）で構成されています。支持的な雰囲気のチームカンファレンスや、多様な立場からのアドバイスにより成功体験を積むことができたことがこの成果につながったと考えられます。

学生の資質向上に寄与し、文部科学省のグッドプラクティスにも取り上げられている事業ですので、引き続きご理解とご協力をお願いいたします。

附属学校園での研修報告

附属教育実践総合センター　稲垣 俊介

私は情報科教育を専門としており、高校の情報科と中学の技術科の接続に興味があります。今回、初任者研修として附属中学校の技術科授業を見学しました。

技術科の授業では情報分野のプログラミング実習が行われ、２時間連続で実施されました。冒頭の５分で先生が実習内容を説明し、以降は生徒の自主性に任せて進行しました。生徒たちはペアでタイルプログラミングを使い、既存のゲームを基に新しいゲームを作成しました。今回の授業はその最終回でした。

生徒たちはiPadで資料を見ながらＰＣでプログラムを作成し、動作確認を繰り返しました。友達にゲームを試してもらいフィードバックを得ることで、自然に学びを深めていました。最終的に完成したゲームのレポートを作成し、授業の最後には先生がプログラムの重要性を述べ、授業を締めくくりました。

授業中、先生が一斉に話す時間はわずか10分程度でしたが、生徒たちは主体的に学んでいました。先生は個別に対応しつつ、生徒の自主的な学習を促していました。このような自走型の授業は、技術科や情報科だけでなく、すべての教科で可能なＰＢＬの形態と言えるでしょう。

この授業を通じて、生徒の自主性を尊重する授業の重要性を再認識しました。特に、少ない教師の介入で生徒が主体的に学ぶ姿勢を育むことができる点は非常に印象的でした。大学でも、このような授業形態を取り入れる価値があると感じました。

芸術身体教育講座　河野 久寿

2024年７月３日に附属中学校を訪問し音楽の授業（１年生２時間と３年生２時間）を参観させていただきました。鑑賞がその日の授業のテーマでしたが、始めに合唱を歌っており参観した全クラスの歌声を聴くことができました。合唱のパート決めでは高音のパート（ソプラノ、アルト）を選ぶ男子生徒が多いことに驚きました。中には地声が明らかに変声期を終えた男性の低い声であるにも関わらず裏声で歌う男子もいましたが、担当の赤池先生は生徒の意向を大事にしてパート決めを行っていたことが印象的でした。コロナ禍の後で子供達は歌うことに抵抗があるのではという思いは杞憂で、生徒が元気に歌う姿を見て安堵感を覚えました。授業を参観しての感想は“青春”。スポンジのようなリアルタイムで吸収している生徒達を目の前にしながら、私自身当時どのような思いや考えで学校生活を過ごしていたのかを思い返し、青春とはある程度年を取って若人との比較で初めて感じるものだと気付かされました。鑑賞の題材はスメタナの交響詩『我が祖国』第２曲「ブルタヴァ（モルダウ）」。故郷を想う気持ちは、住む世界や世代を超えるものだと再認識した次第です。

附属教育実践総合センター　渡部 雪子

2023年10月に本学に着任し、2024年７月に附属特別支援学校でお世話になりました。高等部を中心に見せていただきましたが、朝の登校の様子から朝の会など一日の流れを体験することができました。生徒の皆さんは一緒に話をしてくれ、支援学校の様々なことを教えてくれました。自分の好きな事について目を輝かせながらお話する様子が印象的でした。ラジオ体操や農業体験の授業などもあり、子どもたちは一つ一つ丁寧に一生懸命取り組んでいました。職業体験を振り返る授業もあったのですが、自分たちの体験を他者にわかりやすく伝えられるよう先生がご指導くださっていました。また、休みがちになっている生徒について先生へのコンサルテーションをする機会まで与えていただきました。高等部というお話でしたが、私が中学部や小学部の様子について伺うと中学部と小学部の様子も見せてくださいました。実際に使われている体験を重視した教材の豊富さに驚くとともに、アプリを用いたコミュニケーションツールも実際にご説明くださいました。子どもたちの頑張りと先生方の心温まるご指導を体験できる貴重な１日でした。これからも教育相談の立場で附属特別支援学校の子どもたちと関わっていきたいと思います。このような機会を与えてくださった附属特別支援学校の先生方に深く感謝申し上げます。

編集後記

第42号が無事に発行できたことに安堵しています。寄稿いただきました皆様に心より感謝申し上げます。価値観や制度が大きく変わろうとしている昨今、ＦＤ活動の重要性が益々高まっていることを、この編集を通して再認識しました。